〔研究ノート〕

フランスにおけるシュテファン・ツヴァイク研究の一端

——ドイツでの無関心とフランスでの隆盛——[1)]

山　崎　充　彦*

I

シュテファン・ツヴァイク Stefan Zweig は，1881年，ヴィーンのユダヤ人家庭に生まれ，世紀末ヴィーンの精神風土のなかで自らの思考を形成した作家である。だがナチ政権の成立・ドイツによるオーストリア併合と共に，彼は自宅のあったザルツブルクを離れ，さらには戦乱のヨーロッパをも追われ，1942年，ブラジル・リオデジャネイロで服毒自殺してしまった。

1920代から30年代始めにかけて，ツヴァイクは，ドイツ語で書く作家のなかで，最もよく読まれる作家の一人であった。小説や伝記文学のことごとくが，多くの読者を獲得したのみならず，戯曲はブルク劇場（ヴィーン）などで上演され，また各国で映画化もされた。[2)] リヒアルト・シュトラウスと組んでのオペラの創作と上演も音楽史に遺る業績である。こうした意味において，彼もまた，多くのユダヤ人が活躍した（広い意味での）ヴァイマル文化の発展に貢献した一人であった。

「私は，依然としてドイツ語で書き，ドイツ語で考えていた。しかし，私が考えるあらゆる思想，私が感じるあらゆる願望は，世界の自由の為に闘っている国々のもとにあった。」[3)]

＊本学非常勤講師

キーワード：シュテファン・ツヴァイク，フランス，伝記，焚書

ツヴァイクの母語はドイツ語であった。彼は確かに，ドイツ語で作品を書き，考えるという意味において，まぎれもなくドイツ語の作家であった。しかしながら，彼の脳裏にあったのはドイツ語でもオーストリアやドイツだけでもない。「私の心が選んだ本当の故郷，ヨーロッパ」[4] これこそが彼の意識の根底にあったものである。

「精神におけるヨーロッパ人」ツヴァイクの読者・研究者は，当時からドイツ語圏を超えて，ヨーロッパ各地にそして世界に拡がっていった。彼の作品は，50以上の言語に翻訳され，カイロからリスボンまで，はたまた上海からメキシコ市に至るまで，旅人が書店でツヴァイクの本を見いだせないところはなかったと言われる。[5]

日本においても，大正15年（1926），『ロマン・ローラン』が服部竜太郎訳でアルス社から刊行されたのを皮切りに，昭和２，30年代には多くの作品が複数の訳者によって競うように邦訳された。さらに，昭和37年（1962）には，みすず書房から，第一次の『ツヴァイク全集』全19巻が刊行されたのに続き，決定版ともいえる『ツヴァイク全集』全21巻が昭和51年（1976）に公刊されている。これによって，現在，彼の主要作品のほぼすべてを日本語で読むことが出来る。

こうした，日本におけるツヴァイクへの関心の高さを背景にしつつ，昭和30年代には飯塚信雄が熱心にツヴァイク研究を行い，その成果は，『ヨーロッパ教養世界の没落―シュテファン・ツヴァイクの思想と生涯』（理想社，1967年）という形で世に問われた。

だが，雑誌論文を別にすれば，戦後日本におけるツヴァイク研究書は，この飯塚の著書一冊に過ぎない。つまり日本においては，ツヴァイク「研究」は，とても隆盛を極めていると言える状況ではない。早くから全集が刊行され，翻訳がかくも盛んであり，多くの読者を現在もなお獲得しているにも拘わらず，である。

事態はドイツ語圏においてより深刻である。その作品数の多さと国際的知名度のわりには，ツヴァイクに関する研究は他の作家に比べても少なすぎる

ように思われる。ツヴァイクとほぼ同時代を生き，（理由は違えども）同じように亡命地で自殺したヴァルター・ベンヤミン（難解を以て世にきこえるベンヤミンの本の，生前における売れ行きは，とても ツヴァイクにはかなわない）に関する研究と比べればその差は歴然である。[6] 例として，ロロロ叢書（rororo）に掲載されているドイツ語による研究文献数（作家本人の作品や書簡集，妻による回想記を除く）を比べてみよう。ツヴァイクについての研究文献数は，単行本・論文を含めて44点であるのに対して，ベンヤミンについては単行本だけで53点，研究論文は76本に及ぶ。（勿論これはあくまで一例であって，特にベンヤミンについては，実際にはこれを遙かに上回る数の文献が世に出ている。）[7]

こうしたドイツ語圏におけるツヴァイク研究低迷の原因の一つは，ナチスによるユダヤ人作家の迫害，焚書にある。これによって，家庭の書棚からツヴァイクの書物が消え，ドイツ語圏におけるツヴァイクの影響力は急速に萎んでいった。

「私の文学作品は，私の書物が幾百万の読者の悦びとなっていたまさにその同じ国において，私がそれを書いた侭の言葉では，焚かれて灰に帰した。それ故，私は，もはやいずこにも属さない。いたるところにおいて異邦人である。」[8]

戦後になると，いわゆる民主主義諸国においてさえもツヴァイクの名声は，色褪せることとなった。ツヴァイクの伝記を著したドイツ人ハルトムート・ミュラー Hartmut Müller は，これに関し次のように述べている。

「ツヴァイクの人気は衰え，文学界が，彼の著作に言及することは極めて少なくなった。多くの文学批評家たちは，彼のことを，単なる大衆作家・娯楽小説の作家とし，過ぎ去った昨日の世界に寄り添っている優雅な文学者とだけ見なすようになった。ツヴァイクの作品は，学校の読書推薦書籍から消えてしまい，今日では，彼の作品に関して文学上の論議が交わされることは極めて稀である。彼の業績は，いわば時代遅れになっているとの観がある。」[9]

このように，ツヴァイクは，現在のドイツでは顧みられることの少ない作家となってしまっている。現代において，ツヴァイクは，本当に忘れ去られた作家となったのであろうか。ドイツにおけるツヴァイク研究の現状に関して，フランス人スルジュ・ニェメッツ Serge Niémetz は，こう述べている。

（質問者）「ドイツで暮らした経験をお持ちですが，ドイツではツヴァイクと彼の作品に関心があると思われますか。」

（ニェメッツ）「いえ，全くないと思います。（ツヴァイクについての）こうした不人気ぶりは，私の取り組み方にも影響を及ぼしています。ドイツ語圏の文化領域に眼をやりましょう。そこでは，ツヴァイクの書物は愛されてはいないのです。ツヴァイクは，文学史家からも，文学批評家からも全く顧慮されていません。ツヴァイクが，些かながらも古典作家の一人として姿を現すのは，フランスの読者や編集者の視点に立つ時なのです。」[10)]

ツヴァイクの作品が熱心に読まれ，彼に関する研究が盛んなのは，彼の母語を公用語としている国々よりはむしろ，ツヴァイクが「永遠の青春の都」[11)]と呼んだパリを擁するフランスなのである。

パリで発行されている文学雑誌 magazine littéraire, N° 351 (Février 1997) は巻頭言に次のような文言を掲げている。

「歴史のパラドックス。ヨーロッパ人の先駆けであり，確固たるコスモポリタンであったシュテファン・ツヴァイクは，ドイツ語圏の国々では敬遠され好まれないのに対して，フランスは，ツヴァイクをして古典に属する作家にまで高らしめている。ここフランスでは，若い世代に属する人々も情熱を込めて彼の作品を読み耽っており，彼の作品は，舞台化され，映画化されテレビでも放映されたものも多い。ツヴァイクの伝記は，彼自身の姿を絶えず探し求めつつ，この作家の輪郭を生き生きと浮き彫りにすることを試みている。こうした穏やかならざる状況つまりは汲み尽くせぬほどの興味の乱戦は，ツヴァイクをして，消え去りし世界

の生き残りたらしめている。世紀末ヴィーンからブラジルへの亡命という，彼の人生は，今世紀の大激変と密接に結びついている。彼の伝記や消息を観れば，彼の能力が，時代が歪めてしまったものの深淵や人間の本性の神秘を探索する術を心得ていることが解る。いわば，（彼の人生は精神の格闘者の一コマなのである。」[12]

確かに，フランスにおいては，ツヴァイクの作品は大部分が訳され，Le Livre de Poche のシリーズや Grasset 社から出版されている。また，La Pochothéque では彼の作品は三巻（第一巻は小説，第二巻は小説と戯曲，第三巻はエッセイ）に纏められている。さらに，ツヴァイクの伝記4冊のうち3冊はフランス語のものであり[13]，ドイツで出版された彼の写真集もが翻訳されている。[14] こうしたことは，フランスにおけるドイツ語圏の作家としては全く異例の扱いであるとされる。[15]

II

1996年，フランスでは二冊のツヴァイクの伝記が公刊された。

・Dominique Bona, Stefan Zweig-L' ami blessé. éd. Plon.

・Serge Niémetz, Stefan Zweig-Le voyageur et mondes. éd. Belfond.

ドミニク・ボナは，フランスで活躍中の伝記作家であり，1987年の作品 Romain Gary でアカデミー・フランセーズの伝記部門グランプリを受賞している。[16] 彼女の最新作 Stefan Zweig-L' ami blessé は，勿論ノンフィクションではあるが，体裁は小説としての色彩が濃い。全編に亘って，註が極端に少なく，引用文献の出典が殆ど明示されてはいない。手紙魔であったツヴァイクの書簡の全文引用に頼ることも少なく，もっぱら著者の筆の力でツヴァイクの生涯を描ききるという点において，まさに「小説」である。また，作品の紹介や批評よりは，ツヴァイクの生涯に的を絞っているという点で，「伝記」なのである。

例えば，妻のフリデリーケと秘書のロッテという二人の女性をめぐる叙述などである。1934年，既にナチ政権が成立し，ヨーロッパ文化の危機に心痛

めていたツヴァイクにとって，女性問題はまた別の苦悩であった。投宿先のホテルにおける三人の葛藤など[17]，本書は彼の生活を，真に迫って描くことで生身の人間ツヴァイクの姿を明らかにしようとしている。

だが，magazine littéraire N° 351 の批評に依れば，本書には幾つか批判すべき点もある。「ドイツ語文献に責任を帰せうる範囲を超えるほどに多くの不適切な情報が入り込んでいる」として，フラマン人の芸術家 Masereel の名が，Frans であるにも拘わらず，Franz としていたり，ベルギーの建築家 Henry van de Velde を Van der Velde と記している点を挙げる。[18] ただ，こうした不適切とされる記述は，そもそもツヴァイクの日記がフランス語に翻訳された際に生じたものであり，ボナだけにすべての責任を帰するのは酷であると弁護もしている。

ニェメッツは，1946年に生まれ，文学の教授資格を持ち，フランスとドイツの文化交流に関心を持ちつつも，翻訳が本業である。代表的な訳業は，ツヴァイク，『昨日の世界』のフランス語訳 Le Monde d' Hier であり，このツヴァイク自伝の新しいフランス語訳の作業こそが，彼とツヴァイクとの青年時代以来の再会となった。

Stefan Zweig-Le voyageur et mondes の叙述の中心も，文学作品の紹介や批評よりは，人間ツヴァイクの姿である。その際，ニェメッツが厳に戒めるのはツヴァイクへの無条件の讃美である。ニェメッツはインタヴューで次のように答えている。

> 「ツヴァイクは私の眼から見れば，二流の作家であり，ほどほどで月並みな作家のように思えるのです。これが私が暫く彼から離れていた理由です。彼の基調にある妥協的なもの，これが私とツヴァイクとの間の障害物となっていました。……しかし，ツヴァイクにおける闘争精神の欠如つまりは融和的精神と取り組んでみると，また，そうした融和的精神に関する彼自身の理由づけではなく，その基底に秘められたる動機づけにまで思いを巡らせて，かかる融和的精神を洞察するようになって，ようやく私は，彼の精神を理解し，共感を抱くに至ったのです。」[19]

本書で注目すべき点の一つは，ツヴァイクの膨大な手紙類の引用紹介である。(一説には，ツヴァイクは二万乃至三万通の手紙を書いたと言われており，「20世紀前半のドイツ語作家のなかで最も多く手紙を書いた人」[20] とされている。) 数多く遺されているツヴァイク自身の書簡はもとより，ロマン・ロランを始めとする多くの知己たちの手紙をも引用することで（但し，本書においても註は付されてはいない)，ツヴァイクと同時代人たちとの交流や彼らが生きた時代と世界を描き出そうとしている。それにしても，ここに登場する人物は，二十世紀前半におけるヨーロッパの知識人を殆ど網羅するかのようであり，綺羅星の如き人物と，社交の場としての数々の名門ホテル，それらは，今日ではまさしく「昨日の世界」のものとなってしまった。

本書に関する magazine littéraire N° 351 の書評に依れば，ニェメッツは，「確かに，ツヴァイクが持っていたドイツ文化の世界をよく自らのものとした。ニェメッツは，大きな確信を以て，このドイツ文化の世界を復元してはいる。そのせいか，彼の業績が詳細を極めるものなのは疑う余地もないにせよ，しばしば，彼は，フランスの文学風土，さらにはフランス文学とドイツ文学との関係を描くこととなった。……。」[21]

III

二冊のツヴァイク伝は，いずれも1996年の刊行であるが，1997年に入ってからの文献として看過ごすことのできないものが，本稿において再三引用している文学雑誌 magazine littéraire の N° 351 (Février 1997) である。本号は，「シュテファン・ツヴァイク　ヨーロッパの作家 Stefan Zweig, écrivain européen」と題して，約50頁にも及ぶツヴァイク特集を組み，十数本の記事を掲載している。

「ツヴァイクは，女を描くに華麗なる手法を持っている。……私は，仕事をする為に，プルースト，ヴァレリー，サルトルそしてツヴァイクを必要とする」[22] と発言するソニア・リキエル Sonia Rikyel へのインタヴューや，「ツヴァイクは闘士でも行動する人でもなかった。そこから，彼の政治姿勢

への誤解が出て来る。シオニズムを拒絶しつつも，彼は，一定程度の留保を以て，ユダヤ人と反ナチズムの為に身を捧げた」とする論文「ユダヤ人と反ナチ」[23]，「偉大な台本作者でもあったフーゴ・フォン・ホーフマンスタールの死後，リヒアルト・シュトラウスは，ツヴァイクが案を出した喜歌劇に熱中した。この二人の実り多き協力の歴史をナチズムが暗くしてしまった」と指摘する「リヒアルト・シュトラウスとの出逢い」[24]，また「1936年，ツヴァイクにとってのブラジルの＜発見＞は，……ブラジルへの先入観をひっくり返すものであったが，それはまた，一連の軽蔑と誤解に門戸を開くものでもあった」と論じる「ブラジルの発見」[25] など，多岐に亘る記事が掲載されている。主な記事の見出しを紹介しておこう。「Michelle Cayrol：年譜」・「Lionel Richard：ツヴァイク，自分自身を探し求める作家　スルジュ・ニェメッツへのインタヴュー」・「L.Richard：好奇心の魔王」・「Valérie Marin La Meslée, Gilles Costaz：ツヴァイクの情熱，Sonia Rikyel, Marion Bierry, Jean-Claude Carriére へのインタヴュー」・「テレビ化されたツヴァイク」・「Isabelle Rabineau：1942／第二の姿」・「Monika Natter：ヨーロッパの知識人」・「Fabrice van de Kerckhove：Verhaeren との友情」・「ツヴァイク自身の初公刊書簡：Albert Mockel 宛，Henry van de Velde 宛(1932年２月)」・「M.Cayrol：ユダヤ人と反ナチ」・「Antoine Livio: Richard Strauss との出逢い」・「Michel Riaudel：ブラジルの発見」・「Georges Lomné：南アメリカというユートピアの放棄」・「文献目録　フランス語でのツヴァイク」。

さて，ツヴァイクの母語の国ドイツよりは，フランスでこそ，ツヴァイクが読まれ，また文学雑誌で特集記事まで組まれる理由は何処にあるのであろうか。本誌の巻頭インタヴューで，ニェメッツは，次のように答えている。

（質問者）「では，特にフランスでのこの熱狂ぶりをどう説明されますか。」

（ニェメッツ）「実を言うと，こうした熱狂ぶりには長い歴史があります。ツヴァイクの成功は，30年代に再び高まりました。この時代以降，

彼の地位は，フランスとラテン・アメリカの諸国で不動のものとなりました。ツヴァイクが，オーストリアやドイツにおいては知られていないなどということは勿論ありません。しかしながら，その時代，彼は，いわば試練の時にさしかかっていたのです。大雑把に言うならば，私には，ツヴァイクがそこで，モーロワがフランス文学において占めたのと同じような位置にいたように思えるのです。フランスとドイツ語圏諸国との間のこうした齟齬は一体，何故なのでしょうか。おそらくは，ドイツにおいて第三帝国が生み出した断絶，そうした断絶をフランスが知らないことでしょう。フランスにおいては，ツヴァイクを読むことは続いています。今日，我々の子どもたちの本棚に，彼の書物を見つけることが出来るのと同じく，嘗ては，我々の両親の本棚に，彼の書物を見いだし得たのでした。……彼自身，フランス文化に傾倒していましたし，フランスでの彼の書物の刊行に関しての質には特に留意していました。ここ数年来フランスで，ツヴァイクが再び格別な関心を持たれているのは，何故なのでしょうか。私は，それを自問しているのです。……」[26]

現状に鑑みて言えるのは，シュテファン・ツヴァイクは，彼の母語を用いる国々よりは，むしろ，彼の絶筆となった作品『バルザック』の主人公が生きた国においてこそ，多くの支持を得ているという点である。それがツヴァイクの意に叶ったものか否かは別にせよ。

IV

最後に，ツヴァイクの自殺に関しての見解を紹介して本稿を終わる。

「オーストリアの知識人の自殺のなかで特殊なのが，ナチスに迫害されたユダヤ人の自殺である。これは他のヨーロッパ諸国に比べると，オーストリアでは特に目立つ」[27] とも指摘されるが，その代表例は勿論ツヴァイクである。

ツヴァイクの自殺について，ヴァルター・ラカーは，こう述べている。

「亡命者自身の間では，挫折感が広く蔓延していた。それも単なる政治

的な意味での挫折感ばかりではなかった。これがセンセショーナルな形で現れたのが，トゥホルスキー，トラー，及びシュテファン・ツヴァイクの自殺であった。」[28)]

ツヴァイクの自殺を，ニェメッツはまた別の観点から捉えている。

「彼の作品と彼の死についての発言を考えれば，これは自由な死です。自殺はまことの自然死であり，これによって，人間の自由を現実のものと出来るのです。その最初の機会に彼は決断しました。この死，私はこれが，クライストの小説を真似たヒロイズムに値いするものとか，それが完遂されたものとは思っておりません。この死はストイシズムなのです。」[29)]

こう述べて，ニェメッツは，magazine litteraire, N° 351 のインタヴューを締めくくっている。

ツヴァイクの死をめぐっては，様々な解釈があろう。ツヴァイク研究は決して終わってはいない。

注

1) 本稿は，現代フランスにおけるツヴァイク研究の一端を紹介したものであり，「学界動向」のような性格の論稿であるが，桃山学院大学国際文化学会投稿規定の区分上，「研究ノート」として公刊することを許されたものである。

2) ロロロ叢書のツヴァイク伝が挙げている作品に限っても，1924年から1988年までの間で，ツヴァイク原作による映画作品は13本に上る。しかもこのリストは映画化されたものを網羅しているわけではない。これらのなかでも，“Brief einer Unbekannten” を原作とする，アメリカ映画「忘れじの面影（A Letter from an Unknown)」(M. オフュルス監督，ジョーン・フォンティン主演，1948年，ユニヴァーサル制作）や，“Angst” を原作とする，イタリア・ドイツ合作映画「不安（Angst)」(ロベルト・ロッセリーニ監督，イングリッド・バーグマン主演，1954年）などは，日本でも公開されよく知られている。
Vgl. Hartmut Müller, Stefan Zweig (rororo), Reinbek bei Hamburg 1988, S.153.

3) Stefan Zweig, Die Welt von Gestern, Erinnerungen eines Europäers.

(Stockholm 1944), Wien 1952, S.394.
シュテファン・ツヴァイク，原田義人訳，『昨日の世界　II』，みすず書房，1973年，642頁。

4) Ebd., S.8.『昨日の世界　I』，5頁。

5) Müller, Stefan Zweig, S.8.

6) こうした点は，勿論，比較の問題であって，現在のドイツ語圏においてツヴァイク研究が皆無に近いという訳でもない。事実，彼の作品はその殆どが，Fischer社などから刊行されて，現在も容易に入手可能であるし，1993年には彼の詳細な写真集・伝記が公刊されてもいる。
Vgl. Stefan Zweig, Bilder Texte Dokumente, Herausgegeben von Klemens Renolder, Hildemar Holl, Peter Karlhuber, Salzburg und Wien 1993.

7) Vgl. Müller, a.a.O.,S.150f.
Vgl. Bernd Witte, Walter Benjamin (rororo), Reinbek bei Hamburg 1985, S.148f.

8) Zweig, Die Welt von Gestern, S.8.『昨日の世界　I』，4頁以下。

9) Müller, a.a.O.,S.10.

10) Serge Niémetz, "Zweig, auteur en quête de lui-même", propos recueillis par Lionel Richard,: magazine littéraire, N° 351, Février, Paris 1997, p.26.

11) Zweig, Die Welt von Gestern, S.122f. 前掲訳書，190頁以下。

12) magazine littéraire, N° 351, p.16.

13) 本稿で挙げた二冊以外には次のものがある。Jean-Jacques Lafaye, L'avenir de la notalgie, Une vie de Stefan Zweig, éd. Le Félin, 1989.

14) Stefan Zweig, Instants d'une vie, album traduit de l'allemand, éd. Stock,1993.

15) magazine littéraire, N° 351, p.26.

16) 彼女の作品，Gala, biograpie, 1995 は，岩切正一郎訳，『ガラ　炎のエロス』として筑摩書房より刊行されている。

17) Voir, Dominique Bona, Stefan Zweig-L'ami blessé. Paris, 1996, p.259.

18) magazine littéraire, N° 351. p.31.

19) Ibid., p.26.

20) Müller, a.a.O.,S.10.

21) magazine littéraire, N° 351, p.31.

22) Sonia Rykiel, “La passion de Zweig”, propos recueillis par Valérie Marin, La Meslée, ibid., p.34-35.

23) Michelle Cayrol, “juif et antinazi”, ibid., p.52.

24) Antoine Livio, “La rencontre avec Richard Strauss”, ibid., p.54.

25) Michel Riaudel, “La découverte du Bresil”, ibid., p.58.

26) Niémetz, ibid., p.26.

27) William M. Johnston, The Austrian Mind, An Intellectual and Social History 1848-1938, Los Angeles, 1972, p.178. ウイリアム・M・ジョンストン，井上修一・岩切正介・林部圭一訳，『ウイーン精神　I』，みすず書房，1986年，273頁。

28) Walter Laqueur, WEIMAR, A Cultural History 1918-1933, London, 1974, p.270. ウォルター・ラカー，初宿正典・八田恭昌他訳『ワイマル文化を生きた人々』，ミネルヴァ書房，1980年，342頁。

29) Niémetz, magazine littéraire, N° 351, p.30.